

## 「晩秋の小石川植物園 (3)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

小石川植物園の正門から少し坂を上ると、左側に細い道がある。段丘崖の下にある正門よりは標高が高いが、台地よりはずっと低い位置だ。



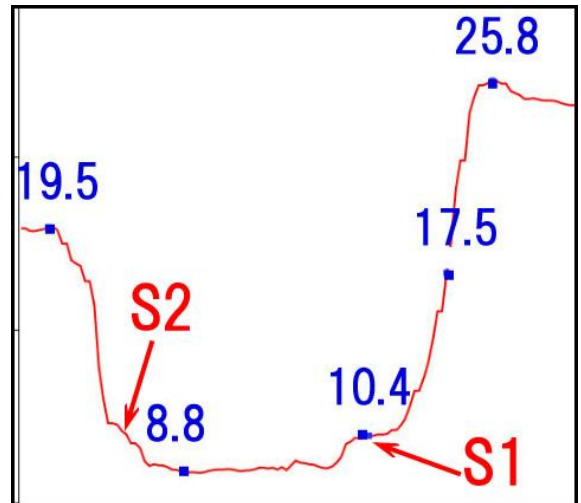
正門から入ってこの道を進む人はあまりいない。どちらかと言えば、園内の散策を終えたあとの帰り道に利用する人が多いようだ。絵に描くには美しい道だ。



この道は、右上地図の青い線で表わした部分にあたる。この道の法面を造る為に、人工的に盛土をしたとは思えない。段丘崖の下に2本の道を平行に造るには、特に盛土をしなくても容易だっただろう。だとしたら、この少し高い場所は、自然の地形の可能性がある。

その下の図はこの付近の標高断面図の拡大図である。最も標高の低い低地(浸食谷の底、標高8.8m)から、段丘崖下の少し高い道(S1)までの比高は約1.5mである。これだけなら自然の段丘とは思えない。

しかし浸食谷の対岸(S2)にも不明瞭ながら低い段差があり、標高もS1とほぼ同じだ。恐らく、浸食谷の底よりも、S1やS2の一段高い段丘(中位段丘面)のほうが、川によって浸食された年代(離水年代)が少し古いのだろう。



こうした例は、各地の段丘で見られる。下図は、金沢市内の犀川が浸食した段丘の図である。「あ」「い」「う」の3つの段丘面があるが、それぞれ離水年代が異なる。特に「あ(犀川沖積地)」と「い(笠舞段丘)」の比高はわずか2mで、現地では段差にほとんど気付かない。

